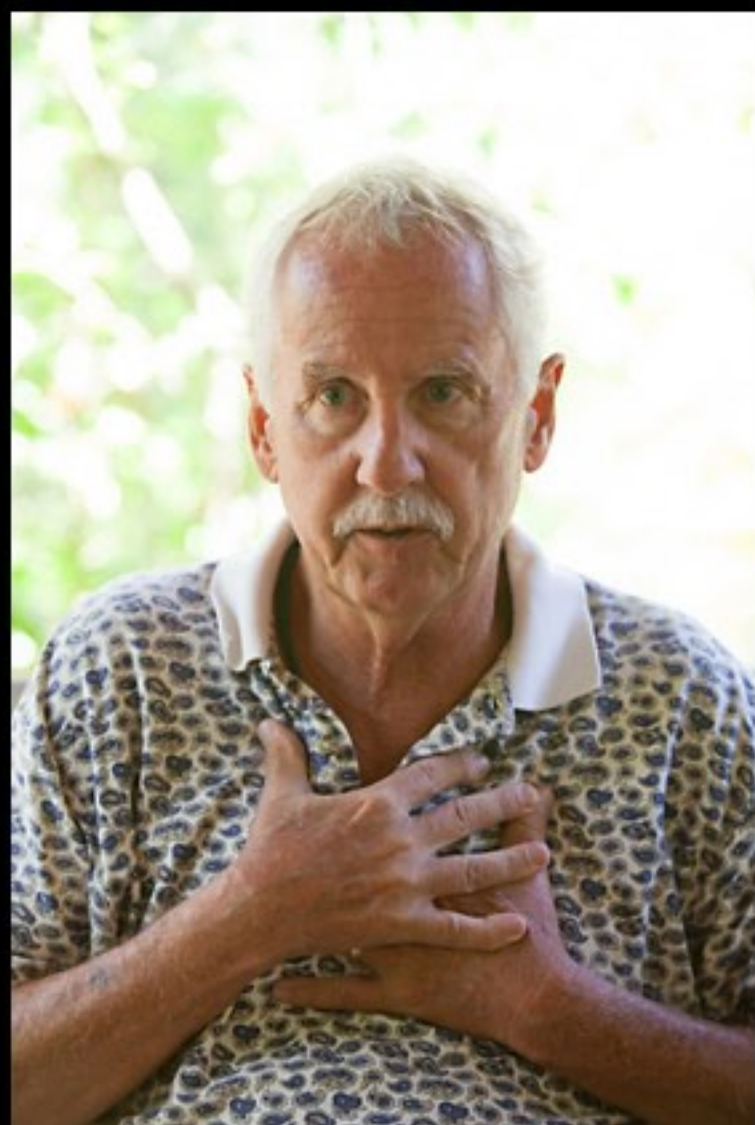


第7回 ゲイリー・M・フォンティン ハワイ大学名誉教授  
異郷の地に適応できる心を求めて

異文化理解教育の先駆者たち



第二次世界大戦後の移民流入やベトナム戦争後のインドシナ難民の受け入れによって、アメリカでは人種差別問題などが生じ、多文化社会への対応を余儀なくされました。その解決策として異文化コミュニケーション力の強化が注目され始めた1970年代、異文化に適応する人々を支援したいという志を持ち、この分野に飛び込んだ人物に、現在ハワイ大学で名誉教授を務めるゲイリー・フォンティン氏があります。教育、トレーニング、研究など、異なる現場を行き来するフォンティン氏の活動は、日本において異文化理解教育を追求してきた神田外語グループの歩みと共通するものがありました。（構成・文：山口剛/写真：山口雄太郎/文中敬称略）



ゲイリー・フォンティンには社会心理学者としてのある関心があった。仕事にも暮らしにも満足している人々が、やむない事情で環境や文化、社会システムの異なる「異郷の地」へと移住しなければならないとき、心のなかで何が起きるのか？ その変化は、人々の心や信念、意欲にどのような変化を起こすのか？ 彼は、こういった自身の関心が、当時新しい学問領域として注目され始めた異文化コミュニケーションと一致することに気づいた。フォンティンは1970年代、刑事司法システムを心理学的な面から研究してきた。しかし彼は、自身の研究対象を刑事司法システムから、文化の異なる人々が意思疎通を図るうえでの課題、そしてより効果的に課題に対処するためのスキルの解明へと切り替えたのである。

昭和54（1979）年、フォンティンはハワイへと移った。ハワイはアメリカの異文化理解教育において中心的な役割を果たしている。その流れを牽引したのは、イースト・ウエスト・センター（East-West Center）とハワイ大学だった。センターでは、ハワイ大学で学ぶ太平洋地域やアジア諸国からの留学生を支援するとともに、シンクタンクとしてアジア太平洋の地域研究を行ってきた。そしてハワイには元来、アメリカで最も豊かな多文化共生の土壌があり、大いなる「実験室」としての役割も果たしていたのである。

フォンティンがディレクターとしての職を得たのは行動科学研究所（The Institute of Behavioral Science : TIBS）である。同研究所では、沖縄などに駐留するアメリカ軍の兵士、海外に赴任する外交官やビジネスパーソンを対象に、異文化に適応するための研修を手がけていた。フォンティンは同研究所とともに、アメリカに定住を図ろうとする外国人のトレーニングを行い、国連難民高等弁務官事務所の助成金を得ながらインドシナ難民がアメリカ社会に順応するための支援をした。そして、昭和57（1982）年にはハワイ大学に新たに設立されたコミュニケーション学部の教授に抜擢された。同学部の主眼のひとつは異文化コミュニケーションだったのである。

1980年代初頭、異文化理解教育の必要性は日本でも高まっていた。昭和60（1985）年9月のプラザ合意によって生じた急激な円高によって、日本企業は海外に生産拠点を展開し始めた。世界という舞台でビジネスを始めた日本は当然のことながら、異文化の人々と対等に渡り合うことを余儀なくされていったのだ。（1/4）

異文化理解教育の先駆者たち

第7回 ゲイリー・M・フォンテイン ハワイ大学名誉教授  
異郷の地に適応できる心を求めて



### 新たな領域の発展に不可欠なのは 教育、研究、実践を循環させること

1970年代、東京には急成長を遂げる英語専門学校があった。神田外語学院である。昭和32（1957）年に「セントラル英会話学校」として開業し、英語を母国語とする外国人教員の充実と、商社や航空会社で働くための実務を教えるカリキュラムが評価され、日本最大の英語専門学校に成長していた。だが、神田外語学院では、2年間のカリキュラムには限界があり、外国人と対等に交渉を行い、ともに事業を作り上げる人材を育成するには、外国語や実務の能力だけでなく、日本と外国の文化に精通した教養を学ぶ大学が必要だと痛感していたのである。



神田外語学院を運営する学校法人佐野学園では、昭和52（1977）年から大学設立の構想を練り始め、昭和57（1982）年には大学設置準備室を開設した。準備室ではその後、新大学の教育の特色として異文化コミュニケーションを柱とすることを打ち出し、昭和62（1987）年に神田外語大学を開学。アメリカと日本の両国で、異文化コミュニケーションの高等教育機関がほぼ同時期に萌芽し始めたのは、背景こそ異なるが、世界的な必然性があったからと言えるだろう。



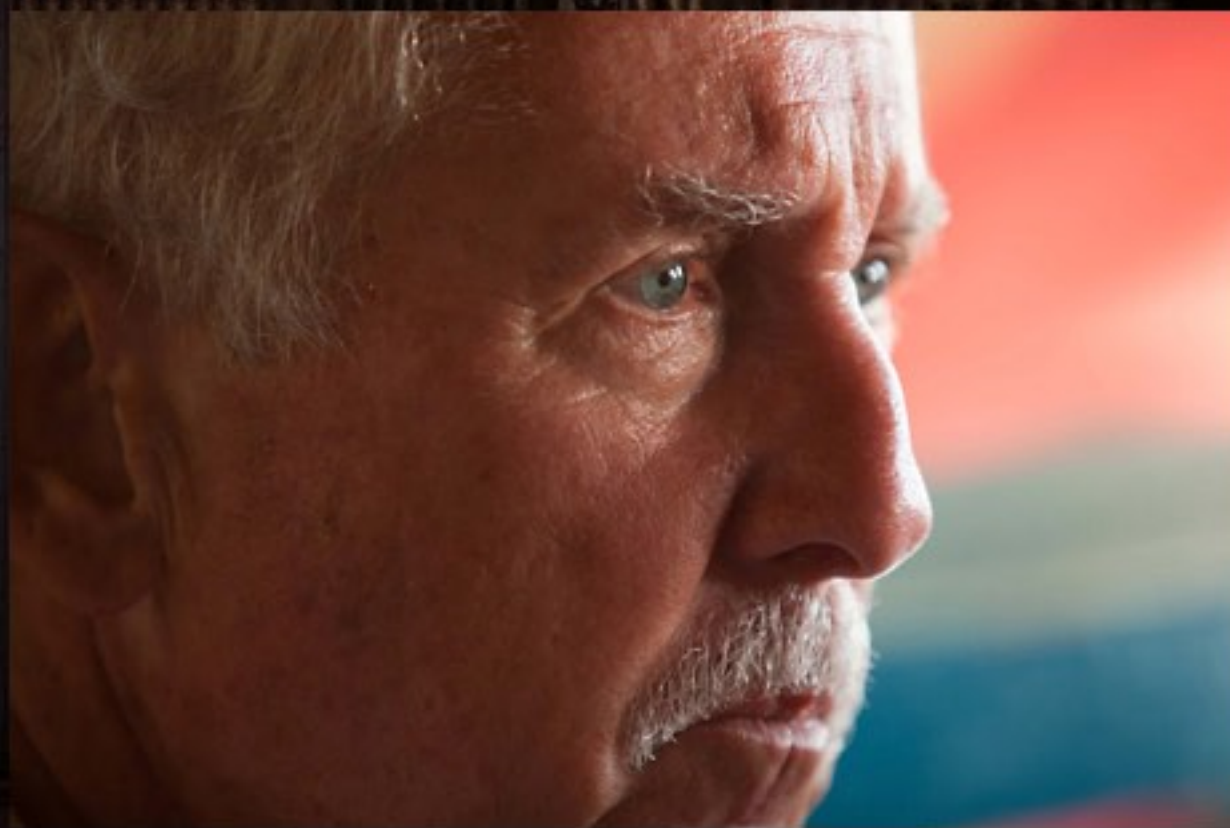
フォンティンは、ハワイ大学で教える一方で、ビジネスパーソンや企業経営者など異文化での仕事や国際的な活動に従事する人々を対象に、異文化コミュニケーションの研修やトレーニングを実践し続けた。その一方で、彼は異文化コミュニケーションに関する研究者のネットワークでの活動にも力を入れた。歴史の浅い分野だからこそ、研究者が集まり、互いに学び合いながら、研究での発見や教育・研修での実践について共有する必要があると考えたのである。彼は、異文化コミュニケーション学会（The Society for Intercultural Education, Training and Research: SITER）や関連する組織を主な舞台としながら、研究や実践の内容を共有する活動を行った。SITERは、異文化コミュニケーションに関する調査研究を行い、その知見を実社会で生じる課題の解決に応用する研究者たちの国際的なネットワークである。

教育、研究、実践を網羅しながら、得られた知見を循環させようとするフォンティンの試みは、佐野学園が構築してきた事業内容に通じるものがある。まず、教育機関としての神田外語学院や神田外語大学がある。大学に附属する研究所では、異文化コミュニケーションや日本文化、言語教育に関する研究を行ってきた。そして、中世イギリスの村を再現し、異文化環境で外国語によるコミュニケーション力を高める場を提供する国際研修施設「ブリティッシュヒルズ」も設立。異文化理解の知見を実社会において活用するための機関としては、社会人向けの研修を行う「神田外語キャリアカレッジ」、大学での児童英語教育に関する研究成果を生かして講師を育成する「神田外語キッズクラブ」、異文化理解の能力を持つ人材の派遣業務を手がける「神田外語アソシエイツ」を整えた。

フォンティンや彼の同僚たち、そして神田外語グループの共通点は、教育、研究、実践の各分野を網羅し、得られた知見を循環させようとして取り組んできたことだった。それは、異文化コミュニケーションという新たな領域を社会に広め、必要とする人々にスキルを提供し、学問としての発展を図っていくための必然だったと言える。（2/4）

第7回 ゲイリー・M・フォンティン ハワイ大学名誉教授  
異郷の地に適応できる心を求めて

異文化理解教育の先駆者たち



「群知能」と「存在している感覚」の活用によって  
人は多文化社会にうまく対処する力を得る

異文化コミュニケーションに関する研修やトレーニングを実践してきた経験を踏まえ、グローバル化する世界で多文化社会に対処するのは非常に困難なことであり、フォンティンは指摘する。それは理性だけで対処できるものではなく、実践と試行錯誤が必要だというのが彼の持論である。

「異なる環境に対処する最善の方法は、有効と思える方法を試行錯誤しながら実践することです。うまくいかなければ、別の方法を試してみればよい。隣の人がやっていることを観察し、自分の方法と組み合わせ、最善の方法を探す。すると、自分にとっての最善策が浮かび上がってきます。試してみたから分かることであり、試行錯誤の賜物なのです。人間の生活は、私たちを取り巻く自然環境や気候、社会システム、そして文化や習慣などから成る『生態系 (ecosystem)』に左右されます。課題への対処方法とその結果を同じような生態系にいる人々と共有する。私は、それを群れが生み出す知能『群知能 (swarm intelligence)』と定義しています。

『群知能』では、同じ生態系で使われている他者の方法を観察し、問題を解決するために使ってみて、うまくいけば、より効果的な方法とは何かを模索していくのです。しかし、その方法が有効だという確証はありません。同じ生態系でも、等しく機能するとは限りません。それでも試行錯誤でしか、最適な方法は見いだせないのです」



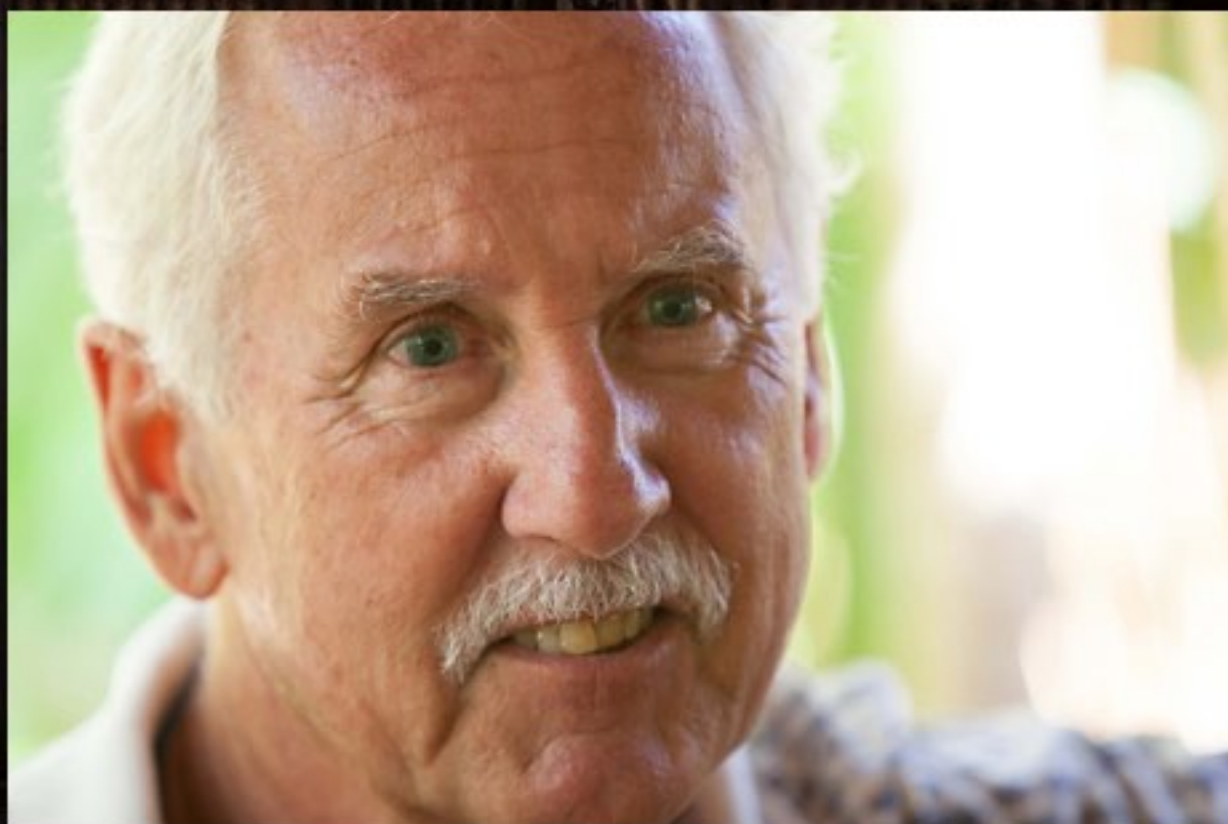
異文化で生じる問題を解決するために、「群知能」の応用に取り組んできたフォンティンは、異文化コミュニケーションにおける研究と実践を大きく進展させた。そして、彼の研究をさらに広げたのは「存在している感覚 (sense of presence)」という概念だった。

「例えば、出席している会議が自分の国、自分の文化圏で行われているのであれば、費やしている意識は10%ほどでしょう。すべては慣れ親しんだものであり、予想可能なので10%で十分なのです。残りの90%は今夜のメニューや家族との関係、済ますべき用事などに費やしています。つまり、繰り返しの日常生活での予想ができる状況では100%で存在している必要はありません。しかし、異郷の地では、何が起きるかをうまく予想できません。何かに気を取られていれば、ミスを犯し、崖から落ち、銃で撃たれ、人間関係を損なうなど、悪いことが起きるおそれがある。だからこそ、異なる文化圏では100%で『存在している感覚』が必要です」

100%で「存在している感覚」を得ると、人は生きていることを実感するとフォンティンは指摘する。この感覚が研ぎすまされていれば、異文化の世界に遭遇しても課題に対処できる。異なる方法に気づき、違う態度で対処でき、任務をやり遂げるために必要な方法を見つけられるのだ。極めて意義深いことがある。意識が覚醒し、生きている感覚を得ると、多くの人々は最適な状態になる。そして、諦めることなく、課題に対処しようというやる気が湧き上がってくるのだ。彼は「存在している感覚」を最大限に利用する方法を研究し、その知見を異なる生態系に対処しなければならない人々へのトレーニングで活用してきた。(3/4)

異文化理解教育の先駆者たち

第7回 ゲイリー・M・フォンティン ハワイ大学名誉教授  
異郷の地に適応できる心を求めて



衝突を解消し、関係を保ち続け、  
「第三の文化」を構築するために

異文化コミュニケーションの実践において最も重要なのは、衝突を解消する能力であると、フォンティンは指摘する。文化の違いは、とても根深いものであり、衝突は避けられない。解決しようとして、問題が悪化することもある。だからこそ諦めずに交流を続けることが重要だと語る。そして、どちらかの文化に合わせるのではなく、第三の文化を構築する。文化の違う人々が共通の目的を達成する会社や組織では、もうひとつの文化を構築する必要があるのだ。

インタビューの最後に、フォンティンは日本社会に関してこんな指摘をしてくれた。「日本は今後、異質を受け入れ、多文化へ対応できるようになるべきです。経済的にも、人口統計学的にも日本の生態系は大きく変化しています。高齢化が進む日本が世界での競争力を保つには、重要な仕事を日本人ではない人々に任せなければなりません。日本企業がそういった人材を獲得し、雇用し続け、忠誠心を持ち続けてもらうには、日本人と変わらない条件で扱い、『日本企業は完璧なパートナーである』と感じてもらえなければなりません。

多様な文化との交流は若いうちから始めるのがよいでしょう。日本の学校と外国人の子どもたちが通う学校の交流を始めればよい。交流を支援するオリエンテーションやトレーニングと組み合わせてもよい。若い世代が適応方法を学ぶことは、日本の多様性への対応力を高めていく有効な手段だと私は考えます」



神田外語グループでは約60年間にわたり、異文化理解教育を実践と理論の両面から追求し、高等教育機関や関連する施設を具現化してきた。その取り組みによって育てようとした人材とは何か？ それは、諸外国の人々と対等に渡り合える人間性や教養、語学力を兼ね備え、相手と共生するバランス感覚を持ちながら、フォンテインの言う「第三の文化」を育める日本人なのだ。神田外語グループの使命は、異文化理解能力の高い人間を育成し、フォンテインの指摘する「日本人が実現すべき多文化社会」の実現に寄与することだと言えるだろう。(4/4)

#### **ゲイリー・M・フォンテイン(Gary M. Fontaine)**

昭和21(1946)年生まれ。ウエスタン・オーストラリア大学で社会心理学博士号を取得。昭和54(1979)年、ハワイの行動科学研究所のディレクターに就任し、同僚たちとともに異文化適応のトレーニングを実践。昭和57(1982)年、ハワイ大学コミュニケーション学部教授に就任し、以来、異文化コミュニケーションの研究、教育、研修に情熱を傾け続けた。平成24(2012)年、同大学の名誉教授に就任。現在は拠点をフィリピンのボラカイ島とアメリカ・シアトル近郊のマーサー島に移し、インターネットで世界の研究者と連携しながら研究と執筆を続けている。